



落語家

桂ひな太郎さん

桂ひな太郎師匠は、古典落語の本格派であると同時に、市民向けのセミナーで成年後見や相続をテーマにした新作落語を披露する異色の噺家さんでもあります。インタビューでは、成年後見などを市民にわかりやすく伝える技術に膝を打つとともに、亡き古今亭志ん朝師匠への熱い想いに胸を打たれました。

（聞き手・構成：伊藤 敬史）

成年後見落語～わかりやすく伝える極意

——師匠は、成年後見制度や相続に関する新作落語を作って、啓発活動をされていますね。そもそも成年後見制度について落語で伝えようとお考えになった経緯をお聞かせいただけますか。

最初は、平成16～17年頃に、司法書士会に呼ばれて『代書屋』という落語をやった際に、落語なら人集めにいいし、わかりやすいから、成年後見制度を題材にして新作落語を作ってくれないかと頼まれたのがきっかけです。それで認知症になったお母さんがいて、どうしたらいいかわからない息子が周りに相談をして騒ぎが起きるみたいなストーリーの大筋を作りました。

ただ、最初は、制度の説明ばかりで、落語にならなかったんです。それで、なるべく説明を省こうと考えました。制度の説明がいくらよくても、落語だから面白くなければ最後まで聴いてもらえないし、退屈させたら結局難しい話だということになるので、とにかく楽しませることを考えました。

どんどん内容を変えていって、今の形になるまでに2～3年かかりました。

——もう十年以上もやっていらっしゃるんですね。師匠の『後見爺さん』を拝見しましたがけれども、しっかり落語の

世界になっていて、面白いですね。

そこに苦労したんですね。どこを面白くしていこうかということで、笑いが起きるところは少しずつできていったんです。

もともと古典落語もそうなんです。みんなが口伝で伝えて、少しずつ面白いところを足したり、削ったりしながら落語ができるので。音楽とか小説とはちょっと違って、人間が何人も重なって出来上がっていくものなんです。だから出来上がっても、また時代と共に変わることもあるんですね。

——師匠が社会福祉協議会などでやっている市民向けのセミナーでは、第1部の落語で成年後見制度はこういう場合に使えるという具体的なイメージを持ってもらって、第2部で弁護士などの専門家が制度の解説をしているんですか。

第2部の解説でも、私も専門家と一緒に出て、ちょっと役をやることが多いです。例えば、「任意後見と法定後見があります」みたいな説明が出たときに、私が「でも先生、任意後見なんて利用している人は全体の2%いるかないかなんです。法定後見の説明だけでいいじゃないですか」みたいなことをわざと言います。それで、専門家が、「いや、そうじゃないんですよ。任意後見制度で、自分の老後を自分の意思で決めていくことが大事で、それをやっておいた方が家

族にも迷惑が掛からないんですよ」とあらためて説明したりします。

——なるほど。わかりやすいですね。

そういうふうに反対意見を言った方が、聴きやすいんです。正しいことを100聞くと、聞いた人は90以上忘れちゃうんですよ。でも反対意見を一発言って、それに反論して、「違うんですよ、こうですよ」と言うわかりやすくなります。

池上彰さんがテレビで解説している番組も、そうですね。池上さんと一緒に出ているタレントたちも、本当は知っているんだけど、質問した方が池上さんの言葉がより浸透するということで質問している部分もあると思うんですよ。

——人にわかりやすく伝える技術ですね。

人に物を教えるときは、正しいことをいっぱい羅列するよりも、どこか1カ所、大事なところでわざと反対行動と貫通行動をすると、人の意識が強く残るんですよ。だから解説の中では、その部分を作っていくということです。

社会福祉協議会のアンケートでも、それまでよく分からないという回答が大半を占めていたんですけど、そういうやり方をしてから、分かりやすいという意見が80～90%を占めてきました。

——そういえば、『後見爺さん』でも、粗忽な感じの伯父さんがおかしなことを言って、「ご隠居さん」みたいな感じの弁護士が、「それはこうですよ」というやりとりをしますね。

ハつつあん、熊さんがバカなことを言って、ご隠居さんが、「お前さん、何を言っているんだよ、それはこうなんだよ」と言って、「ああ、なるほど、そうなんですか」というのが落語の世界ですからね。

——師匠の落語の中で、「統計的に4人に1人が認知症になるんです。この中でいうと…」と言って会場の前列をじっと見て、笑いをとる場面がありますね。あれも、その確率が具体的にイメージできて、説得力がありますね。

2025年頃には、予備群も含めれば、65歳以上の4人に1人ぐらいが認知症になるという話ですね。あれで会場に並んでいる人を指さすと、わかりやすいし、みんな笑ってくれていいんです。

世界がもし100人の村だったら、生活に困っている

子どもは何人ですというのと一緒ですよ。分かりやすいじゃないですか。世界中に飢餓で苦しんでいる人が何億人いると言ってもぴんとこないけど。

——長年、成年後見制度を伝える活動をなさってきたことで感じるようになったことはありますか。

高齢者が騙されたり、困ったりするのを見守って助けるということで言えば、後見制度だけではなくて、振り込め詐欺に対する警察の対応とか、地域の見守りも必要で、町のいろいろな人が連携する必要がありますね。例えば、騙されてお金をとられたら弁護士に頼んで裁判という場合もあるし、ケアマネージャーが身上監護的なことを様々に取り決める必要がある場合もあります。そういうことが4～5年やって飲み込めてきて、それからは自分でやりやすくなりましたね。

最初をよく分からないから、自分の知っている一部の範囲で話をしていた、中途半端だったんだと思います。今は総合的にその地域でどういうふうになっているかみたいなのも全部調べてからじゃないと、うっかりしたことを言えないと感じます。

噺家になった経緯～志ん朝師匠の思い出

——話は変わりますが、噺家になろうと思ったきっかけを伺えますか。

高校生のときに、群馬の高校にしては珍しく、落研（落語研究会）があったんですよ。それまで恥ずかしがり屋で人前ではしゃべれなかったんですけど、素人がクラブ活動で落語をやっているのを見たら、すごく下手で、これなら自分でもできるんじゃないかと安心して始めたんです。

そうしたら素人というのはある程度うまくやれば、プロよりも受けるんです。歌でも、素人で小節がきいて、子どもが歌っていれば、みんなワーっとなるのと同じです。それで、自分の方が今テレビに出ている人より笑いが取れると思って、プロになりたいなと思っちゃったんです。

——古今亭志ん朝師匠に弟子入りされたのは、どうしてですか。

最初は、三遊亭圓生師匠にあこがれていました。でも何か難しそうなおじさんだし、怖いというか、勇気がなくて、踏ん切りがつかないでいたんですよ。



そうしたら、ある日、ラジオですごく調子がよくて、明るくて、ワーッと笑いが取れるテンポのいい落語を聞きました。こんな人は初めてで、何という人だろうと思ったら、古今亭志ん朝でした。そうしたら急に、この人の弟子になりたいと思っちゃったんです。ほれ込んだので、この人の弟子以外はなりたくないと思ったんですよ。

——私も初めて志ん朝師匠の落語を聴いたときに、トントントンとテンポがよくて、なんて面白いんだろうと引き込まれました。

志ん朝師匠は、テンポがいいし、分かりやすいんですよ。例えば、立川談志師匠は、囃そのものじゃなくて、あの師匠の人間性というか、あくの強さみたいなものでやっていますよね。うちの師匠は、囃そのものを楽しく聞けるんです。

——弟子入りはすんなり認められたのですか。

落語に関する本を見ると、いきなり弟子を取る師匠はいなくて、みんな断るけど、どうしても弟子になりたいと言えば、たいがい取ってもらえると書いてあったので、断られるのを承知で行きました。

案の定、断られたんですけど、「じゃあ、ご迷惑でもすみません、毎日来ます」と、脅かすみたいなことを言っちゃったんですよ（笑）。そうしたら、応対に出たおかみさんが、「毎日来るって、あなたはどこから来るの?」と。「群馬県です」と言ったら、おかみさんは、東北の方のすごい遠いところだと思ったらしくて（笑）、「そんな遠いところから、毎日どうやって来るのよ?」みたいな話になって。それで、おかみさんが、「こういう子が来て、半端な気持ちじゃないみたいだから、ど

う?」と言ってくれたみたいで、「すぐには会えないけど、何日来れば会えるから」と言われました。それで、その日に会いに行って、わりとすんなり決まっちゃいました。

——初めは、師匠の家に住み込みで身の回りの世話みたいなことをされたんですか。

そうです。住み込み同然です。師匠の家から歩いて2～3分のところに3畳1間のアパートを借りて、朝から晩までずっと師匠の家で、寝るために帰るだけでした。夜中の1時、2時に帰って、朝6時前に起きて、師匠の家に行くみたいな。

師匠の家に来て飲んでいる人がいっぱいいて、帰らないんですよ。そのうち麻雀でも始めて、負けると居残ってずっとやって、朝、行くとまだいるんですよ。それで、寄席に行って、帰ってきてても、まだいるんですよ（笑）。もう2泊3日みたいな感じで居続ける人がいて（笑）。そういう人の食事の支度までしなきゃいけないので、今のブラック企業の社員よりつらいんじゃないかなと思うぐらい……（笑）。

——お弟子さんになってみて、志ん朝師匠はどんな師匠でしたか。

それはもう素晴らしい人でした。人間的にも素晴らしいし、芸はもちろん素晴らしいし。だけど弟子に対しては、一番厳しかったです。

というか、いい師匠なので、夜中でも人がたくさん集まってくるんですよ。だから寝る時間がなくなるんですよ。

——志ん朝師匠のことが好きで、みんな集まってくるんですね。

そうですね。また志ん朝師匠は、そういう人に対して、とてもよくするんですね。食事を出すし、いろいろなお世話もしますし。囃の稽古に来る人もいますしね。

お手伝いさんを雇おうとするんですけど、仕事が大変だから、居着かないんですよ。そうすると結局、掃除、洗濯から食事の支度まで、全部弟子に回ってくるんです。

その噂が広まったので、私の後には、12年間、1人も弟子が入ってこなかったんです。

——そういう内弟子のようなことは、いつまで続いたんですか。

12年間は弟弟子ができませんでした、二つ目になっても前座と同じ仕事をしていて、真打ちになるすぐ手前ぐらいまでやっていました。

——二つ目、真打ちと上がっていったときは、やはりうれしかったですか。

普通は、前座の修業を4～5年やって、二つ目になると自由になれるので、うれしいんです。でも、私は、二つ目になってからの方が大変だったんです。前座は半日間、寄席で働くんですけど、二つ目になったら縛られる時間がないんですよ。ということは、四六時中、師匠の家のために何かしてくれというふうになるんですよ（笑）。

じゃあ、真打ちになったらうれしいかという、真打ちになっても、さっきの状態はあんまり変わらなかったんですよ。多少下に弟子が入ってきたんですが、なかなか居着かないし、たまに師匠の家に行くと、身の回りの世話がちゃんとできてなくて、結局私が半分やるみたいなのがあって。

——ご苦労されたんですね。

また真打ちになるのを一度辞退したのがいけないんです。

——えっ、真打ちを辞退なさったのですか？

落語協会が私を真打ちに抜擢すると決めて、そのまんま黙っていれば、18人か20人抜いて真打ちになるはずだったんですが、私が「それはおかしい」と言っちゃったんですよ。

私は、志ん朝というみんなが認める人の弟子で、たまたまその年にNHKの新人演芸コンクールで優勝したので、真打ちという話になったんですよ。ただ、そこに他の有名な師匠の弟子を2～3人くっつけて一緒に真打ちに抜擢するという話になったので、その矛盾が許せなかったのと、私が抜くことになる人の中に自分より腕がいいと思う人がいたのも、矛盾を感じました。その人も真打ちに入れてくれればと言ったら、「それは関係ない」と言われるわけですよ。「それなら真打ちにならなくていいです」と言って、「生意気な野郎だ」とか言われて。

ただ、ありがたかったのは、うちの師匠はそれが理解できる人なんです。「お前、そういうことをぐずぐず言わなくてもいいんだよ。協会が決めて、会長が決

てくれたことは、ありがとうございますとえばいいんだよ」、「だけど、もういいや、分かった。俺も確かにそう思うから断ってくる」と言って、師匠が断りました。

そういうことがあって何年かしてから真打ちになったので、私としてはうれしくなかったんです。

——そういう筋の通し方って、なんだか噺家さんらしいなと思います。

そうなんです。自分で噺家気取りだったんですよ。「噺家は腕があれば食えるんだから、別にいいよ」と。本当に真打ちの資格をもらっても、実力のない人がいっぱいいて、うちの師匠も嫌がっていたんですよ。だから志ん朝師匠からは叱られなかったんだけど、周りの師匠たちからは、生意気だとか、いい気になるなとか、いろいろなことを言われました。

——志ん朝師匠の芸風を一番継いでいらっしゃるの、ひな太郎師匠だと言われていますね。

私は、師匠の真似事しかしてなかったというか、あこがれてなったので、ついつい。

若いときはいいんですよ。うまい人の真似をしているから、物真似芸人みたいなもので、ワーッとやるけど、自分の芸が固まりかけたときには、やっぱり他人のもののなんですよ。見ている人は、最初は褒めてくれても、だんだん、「年がいったら自分のテンポでもうちよっと遅くしゃべった方がいいけどな」なんて言ってくれる人が出てきて、確かにそうだなと思ったりもします。

だからって急にテンポだけ遅くしてもだめなんです。若い時にあこがれた師匠の形ばかりを追いかけていたから、そういう切り替えがうまくできないというか。自分の才能はそれまでなんだと感じます。自分で自分のことを理屈で責めるところがあって。

逆に、そういう理屈っぽいところがあるから、成年後見落語が向いていたのかもしれないけどね。

プロフィール かつら・ひなたろう

群馬県出身。1977年 古今亭志ん朝に入門、前座名志ん坊。1981年 二つ目昇進、古今亭志ん上に改名。1993年 真打昇進、志ん上の芸名のまま。2001年 師匠古今亭志ん朝 他界。2003年 九代目桂文楽門下に入門、桂ひな太郎に。2005年 成年後見落語「後見爺さん」を発表。以来全国各地で講演を行う。1988年 NHK 新人演芸コンクール 落語部門最優秀賞、1991年～93年 日刊スポーツ新聞社主催日刊飛び切り落語会 奨励賞（現飛び切り大賞）連続受賞、1993年 国立花形演芸会 花形演芸大賞受賞。